

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 サン=テグジュペリ 『星の王子さま』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 61 回のツイキャス読書会の課題図書は、サン=テグジュペリの『星の王子さま』です。  
読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 「星の王子様を読んで」

私がこの本に初めて出会ったのは、小学5年の頃だった。学校の宿題でこの本の読后感想文を書かせられたのである。星の王子様に感情移入でもしたのだろうか、幼心でありながらバラに密かに恋をしていたのをおぼろ気に覚えている。あれからもう10年、大人になった今となって読み直してみたら、まるで10年前の自分の気持ちに戻ったような感覚に襲われ涙が出た。

主人公の「ぼく」はアフリカのサハラ砂漠に不時着する。そこで羊の絵を書いてくれとせがむ星の王子様と出会う。かつて絵を描くのが大好きな少年だった「ぼく」だけど、命を落としかねない状況にある彼に王子様の頼みは邪魔でしかない。王子様のしつこい攻勢に疲れきった彼は、いやいやながら羊の絵を描く。しかし、それは少年の頃の彼が蔑んでいたつまらない大人たちが納得しそうな、はっきりした形をもった絵だった。子供の王子様はそれを受け付けない。形をなしたものは何だか物足りない。結局王子様のお気に召されたのは箱の中にいる、眼には見えない自分だけの羊だった。

王子様が「ぼく」にいろいろ描かせたのは、星に置いてきたバラのためであった。しかし花はか弱い。自分の身を守るものは四つの棘だけ。違う星から虎がやってきて彼女を襲うかもしれない。王子様はバラのもとに行かねばならなかった。地球では有りふれた花でも自分にとっては掛け替えのない、この世で一つしかない大切な花なのだ。

そして王子様は蛇に噛まれることによって元の星に戻った。王子さまは跡形もなく消えてしまったが、「ぼく」の記憶の中に残り、こうやって読者に伝えられている。王子様は元気であるのだろうか。バラは無事だろうか。王子様の愛情を受ける前にもひとりで花を咲かせた強い花だから、王子様が帰ってくるまで無事だったと信じていい。

この本を読んで、自分が地球を旅していた頃の王子様に似ていると思った。今まで私の「バラ」となってくれた人びとを後にして、彼らを疎かにしていたような気がしてならない。これからでも「いつもありがとう」って感謝の気持ちを伝えたい。

(おわり)

## 『星の王子さま』を読んで

自分も相手も儂い存在だ。そして人と人が交われる時間さえもまた儂いということ、この本で痛切に感じた。私は今まで、人との付き合いに関して、儂さをさほど意識してこなかったし、無目的に無邪気に過ごして来てしまった。それは反省すべきことかもしれない。けれど、そういう時間がとても贅沢で愛しくも思い出された。儂いということは、私にはとても美しく思えるのだ。しかし、もう戻れない時間と場所がある。それは切ない。涙も出た。後悔も浮かんだ。

この世の儂さを意識することと、相手との関係性を特別なものとして捉え、時間をかけて育むこと、この二つは自分に後悔しないために大切なんだとこの本は言っているようだ。王子は一輪の薔薇のかけがえのなさを知ってから、薔薇のもとへ行くために死を選んだ。

死とは現実世界のあらゆる現象を消滅させた、究極の選択だ。人間は認識の世界と経験の世界、あの世とこの世、永遠性と限界性の真ん中(の上)に位置して生きていると宮澤さんの音声で最近学ばせていただいている。まだまだ理解は不十分だが、その考えが今の私にはしっくり来ている。だとすると、王子は永遠性だけの世界を選びとったことになる。

薔薇に自らの責任をもって報いるためには、死んで側に行くこと、それしかないと判断したのだろう。そこには、自己自身の使命というものを掴んだ人の強い信念があるようだ。

人は誰もいつかは死に、この世から姿を消す。その時まで、自分の永遠性を、心からかけがえのない何かを感じることができるかどうか、それは人への愛情だけにとどまらず、他の何かへの愛情であるかもしれない。またそれに対して自分がどう向き合い責任を果たすことができるかが、とても重要なのではないだろうか。自分が生きる価値というか、意義というかを、本来求める幸せはどこに求めたらいいのかを考えさせられた作品だった。

(おわり)

メルマガ読者 毒りんごさん

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

拝啓

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリさま

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

わたしは、あなたの著書を読んだことで  
地球というかけがえのない星の奇跡を教えてもらった読者の一人です。

あなたが伝えたかったメッセージのすべては理解できてはいないと思いますが  
人を愛する可能性を信じ、だけど何処か孤独なあなたの気持ちに少しでも近づきたくて  
「星の王子さま」の読書感想文を送ります。

「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。  
いちばんたいせつなことは目には見えない。  
ぼくはぼくのバラに責任がある。」

ごくシンプルな言葉ですが  
とても強くて、優しさに包まれています。

大人が見失いがちな本質を、キツネと王子さまの言葉でなぞり、  
あなたの人生経験で得た「哲学」も込められていたでしょうが。  
わたしの心の深いところまでぐさりと刺さっています。

わたしは飛行機を操縦することはできませんが  
空にひとりぽっちで浮かぶ心地はどんな感じなのでしょう？

空から眺める地球の美しさを眼にしたとき  
地上にいるときよりも自分の存在の小ささを感じるのでしょうか。  
夜空を飛んでいる時間、消え入りそうな命のちっぽけさと向き合って  
あなたは眼下の家々の光や命を愛おしく思ったのですね。

あなたの言葉と出会い、  
わたし自身の弱さやもろい部分を見つめ直して、  
くじけずに鍛えてゆかなくてはと励まされました。

最後に。

あなたの描いた絵が好きです。

素朴な色合いと、迷いのない線に、あなたの強靱な精神を感じます。

文章も絵も心の奥に深く染みいつてくるのは

きっとあなた自身の人間性が鮮やかに現れているから。

パイロットが、もう1度筆と絵の具を取り出したとあったので

わたしも、また絵を描きたくなりました。

次に書く手紙には、わたしにとってたいせつなものを想い、

ちいさなバラの絵を添えたいと思います。

12 Janvier 2018

敬具

(おわり)

## 「それからの王子様」 コンナンデ・イイカナ作

天使(王子)は、懐かしい甘い香りに包まれて目を覚ました。臭いのする方を見ると、あの1本の愛しいバラが自分を心配そうに見つめていた。しかし、バラは目を合わせた途端に、横を向いて素知らぬふりをした。天使は立ち上がると、手にしていた羊の入った箱を、しっかりと両手で抱えて、神様が見える場所に移動した。

「神様！ 私はバラの世話をしないでここから逃げ出してしまいました。本当に大切な物の意味も分かりませんでした。罪を犯した私は、2度とここには戻って来れないと思っていました。けれど神様は許してくださいました。本当にありがとうございます。これからは神の愛を信じて一生お仕えしていきます。」

言い終わると天使は羊の入っている箱を神にお供えた。それから、バラの花に水をあげた。バラの花は枯れてはいなかった。地球での1年は、この星では1週間だったから。

「よかった。生きていてくれて。」天使はバラに話しかけた。

「僕のバラさん。水をしばらくあげなくてゴメンね。」するとバラは相変わらず横を向きながら

「さあ、どこに行っていたかお話してちょうだい！ 私とても退屈だったの。」と言った。

天使は嬉しくなって一連の出来事を語り始めた。

「もちろんだよ。僕も君に聞いて貰いたかったんだ。では始めるね。」

「僕は、この星を追放されてからいくつかの小惑星を見て回った。そして、最後に地球という星に落ちたんだ。その星の人たちは、みんな、一日中、とてもせわしく働いていた。この星よりたくさんの山や花があったけど、ゆっくり見ようともせず、物思いにふける時間もなく、毎日を暮らしていた。どの人も幸せそうには見えなかった。僕は不思議に思ったけど、理由はよく分からなかった。

そうしたら、ある日、リンゴの木の下でキツネに会ったんだ。そしてキツネからとても大切なことを学んだんだ。それは…『本当に大切な物は見えないこと』『絆ができれば責任を持つこと』の二つだった。今思うと、あのキツネは神様の使者だったように思える。

バラさん、僕はキツネのおかげで目が覚めたんだ！ ああ僕はとんでもないことをしてしまったんだと。そして、もうこの星には戻れないけど、神に謝りたい、今までの感謝も伝えたいと思った。その時、僕と同じ様に、何が大切に気が付いていない地球の人たちのことが、頭に浮かんだんだ。僕は、そうだ！ 僕の命を捧げて地球の人たちを救ってもらおうと考えた。そこで僕は、おそらく僕を神様の命令で見張っていたと思うへびに、囓んでもらうことにした。

すると、何と再生されて、この星に戻って来られたんだ！」

バラの花は、最後まで幸せそうに話を聞いていた。

そして、話が終わると、二人は向き合い、同時に微笑んだ。

(おわり)

## 『飼いならすとは』

私は星の王子さまのお話の中で、ありきたりですがキツネが出てくる所が一番好きです。

初めて読んだとき(私の持ってる本は)飼いならす!と書いていて、主従関係?っぽいなと思いながら読んでいましたが、仲良くなった友達には責任がある!と書かれているので、「飼いならす」で良いのかな? と思いました。

世の中には、同じような物、人が沢山あってどれも同じように見えるけど、その物や人はたった一つ、一人しかいないという事を改めて考えさせられました。

キツネは、お別れの時、すごく寂しそうだったけど、王子さまがそっけないような感じで、キツネが可哀想にも思いました。

キツネと王子さまの温度差は何なのかは分かりませんでした。

麦の穂を見るたびに風になびく王子さまの金色のきれいな髪の毛を思い出すキツネは、今までのニワトリを追いかけて、かりゆうどに追いかけられる毎日とは違って、王子さまとの絆を持ったキツネになれたという事は幸せな事だなと思いました。

王子さまにとっての薔薇のように、自分にとっての薔薇のような存在を見つけることが大切だなと思いました。飼いならされるようになるには、相手のためにどれだけ尽くせるか、相手の事を心から思いやる事ができるかが重要になると思いました。

たった一つ一人の存在だからこそ、少しの辛抱や、努力によって幸せな関係が続けていけるのだと思いました。

王子さまのように後から気付くのではなくて、先に気付ければ理想だけど、でもきっと自分の事ばかりを優先させて気付くのが遅れるのだと思う、わたしの場合には。

(おわり)

## 迷わない羊

地球の人口が 70 億人を超えた現在、王様は権力を増す者もいれば失脚する者もいる。失敗する実業家もいるが、賃労働者を踏み台に益々儲ける実家業家が一握りいる。

点灯夫は原子力も使い休む間がない。人工衛星と GPS により世界のどこもかしこも分かり地理学者には良い時代になり、自惚れ屋は SNS のいいね！ 欲しさに手段を選ばない者まで現れた。依存症患者に対する理解は少しずつ広まってきたが、心の弱い人が飲み助になる原因はなくなりはない。

チビ王子のいる星には棘が 4 本ある薔薇が生えているらしい。薔薇は花の女王とされ、棘のない薔薇は聖母マリアと結び付けられるという。

薔薇科の植物には林檎があり、知恵の実を蛇に唆され食べたイヴは神の怒りを買いアダムと共に楽園を追放された。

本作中、蛇はチビ王子を囓み、大切な事を 1 人の大人に伝え終えた後の彼を天に召した。

チビ王子が昔子供だった僕に羊を描いてよ、と頼んだのは何故だろうという疑問が湧いた。マタイ福音書の中に 1 匹の迷える羊の話があったのをなんとなく思い出し、このチビ王子こそが迷える羊なのではないかと考えた。

そして王子が旅した星々にいた、王子に理解出来ない者達は迷わない 99 匹の羊かも知れないと考えた。

我が家のチビ姫も昔子供だった私に突然困る質問をする。一番返答に困ったのは 3.11 の津波の映像がテレビに映し出された際に

「なんで？みんな死んじゃったの？」

と言われた時だった。

私はただ

「うん、そうなんだ。神様が決めてそうってしまったんだよ。だから今生きてる君はちゃんと生きなきゃいけないんだよ」

としか答えられなかった。俺はこんな時だけ都合よく神様を持ち出して非道い親だ、と自分を責めたのを覚えている。

宇宙のどこかにあるかも知れないチビ王子の星や神というものの存在、自然の摂理、人の心など手に触れない、目には見えない、耳にも聞こえないものを恐れ、敬い、いつも感じる心が大切なんだよと我が家のチビ姫達には教えてあげたいとこの作品を読んで思いました。

そう言えばどんな大人だって母胎という宇宙の中からとても険しい旅をしてこの世の中に出てきたんでしたっけ。我が子の誕生に立ち会いながらそんなことも忘れていたなんて。

(おわり)



## 『僕をなつかせて』

やっと、きつねが出てきた。

2年前。私は自分の自己重要感を得たい、どうしたら自分が大事だと思えるかという心の戦いを繰り返していた。そんな時期に、信州読書会さんがメルマガ読者向けにキタキツネの音声配信された。

キタキツネは、用心深い。用心深いキツネをなつかせるには、時間と手間がかかる。自分のファンを作る、自分を見つけてもらって、信頼してもらう過程を例えてのお話だったと思う。その時の私は、自分に誰かを振り向かせたいという発想にはとてもじゃないけれど、なれなかった。その試みには傷つき体験を伴う事が分かっていたからだ。

キツネから、「お願い・・・なつかせて！」と頼まれた王子さまは、「あんまり時間がないんだ。友達を見つけなきゃいけないし、知らなきゃいけないこともたくさんある」と答えるけれど、キツネの助言通り、時間と手間をかけてキツネをなつかせた。

そのあとキツネからバラたちに会いに行くように言われ、「ぼくのバラ」が自分にとってかけがえのない存在であることに気付く。「いちばんたいせつなことは、目に見えない」という秘密を自分の実体験を伴いながらキツネから教わったのだ。王子さまは、半信半疑ながらとりあえずキツネの言う通りに動いて、そして気づきを得た。王子さまは一步を踏み出す勇気があったと私は思う。

私の「自己重要感を得たい」旅も、自分の身近な人との関係性を見つめなおすことから始まった。一番身近な人と信頼関係を結ぶことが、実は一番難しいと感じるから、とても勇気がいった。いったん渡したゴミ袋を手に出勤しようとしている夫に、「あっ、まだゴミがあった、ちょっと待って！」と呼び止められるか。そしてそれを快く受け入れてくれるか。日常の取るに足らないことだけれど、「どうすればお互いに気持ち良い関係を作れるのか」の地道な試行錯誤が、まわりまわって自分への信頼を回復していく道筋なのだと最近気づいた。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

## 『バラの名は。』

(引用はじめ)

〈ぼくはこの世に一輪だけの、財宝のような花を持っているつもりでいたけど、ほんとうは、ただのありふれたバラだった。(中略) そんなものだけじゃ、ぼくはりっぱな王子さまにはなれないよ……〉そうして王子さまは、草の上につつぷして、泣いた。

(引用おわり)

王子さまのみならず、大人が大人であるために、なにかを持っていなければならない。地位、学歴、お金、コネ、権力、美貌など、この世で持っているもので、人は判断される。数え上げればキリがない。ありあわせの人間性だけで見知らぬ世界を生き抜くことは、太平洋を自力で泳いで渡るにひとしい。

王子さまが星に残してきた一輪のバラは、なんでもないバラだった。プライドが高くて、さみしがりやで、嘘つきで、欠点だらけのありふれた性格の女の子だった

(引用はじめ)

「さようなら」王子さまは言った……

「さようなら」キツネはいった。「じゃあ秘密を教えるよ。とてもかんたんなことだ。ものごとはね、心でみなくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」

(引用はじめ)

この「さようなら」は、原文では、「アデュー(adieu)」語源は、「a Dieu (神のみもとへ)」  
長いお別れ、もしくは、死ぬ前の最期の別れだ。

「お前はだれだ、俺はどうしてここにきた？ あいつに会うために来た。助けるためにきた。生きてて欲しかった。誰だ、誰？ 誰に会いに来たんだ？ 大事な人、忘れたくない人、忘れちゃダメな人。」

この作品にも『君の名は。』と同じテーマが描かれている。

この世にアデュー(adieu)を告げる前に、私たちは、ありふれたものとの間の目に見えないも関係にもアデュー(adieu)を告げている。いま、すでに、私たちは多くのものを忘れつつあるのかもしれない。

大事なもの、忘れちゃならないもの、忘れちゃダメなもの、一輪のバラ、造花の水仙、相手が自分のために費やしてくれた時間、あるべき世界、人間性への責任、神との関係、意志、永遠なるもの…… 目には見えないもの……

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)  
今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)